

ラオスの子供に絵本を送る会通信

第7号(1996年4月発行)



小学校の読書の時間。サイヤプリ県パクラライ郡

「からだで表現するワークショップ」レポート

あさぬま ちずこ

パントマイマーが、からだで感じたラオスの子どもたち。
そのレポートを、前回に続いてお届けします。

■サイヤプリ ワークショップ

6月2日(金)～6月9日(金)

まず第1に、サイヤプリのスタッフの熱意を明記したい。特に中心になって動いてくださった女性の熱意は、賞賛に値する。彼女の念頭にあるのはいつも、より多くの子供にとってより良い事は何か、であった。そこに向かってベストを尽くそうとしていることが分かるだけでも、私

は信頼して仕事ができるし、多少のトラブルは乗り越えていくことができる。

スケジュールは到着当日、翌日、そして最後の日の3日間。彼女の勤めているサイヤプリの中心にある大きな小学校、それ以外の3日間、それぞれ周辺の小さな学校を午前・午後と1日に2校たずね、それぞれでパントマイム鑑賞会とワークショッ

プをおこなった。

3日間行った中心になる小学校は、木造の古いづくりの所だが、図書館は夏休み中も開館しており、ワークショップをしても、その積極性・能力が、ピエンチャンのC.C.C.の子供達と全く変わらない。ここでも日頃の教育関係者の努力がよくわかるというものだ。私がC.C.C.の子供達と作品をつくっている最中に、このの

左に立っているのが、あさぬまさん。



スタッフはピエンチャンに来ており、それを見学して行った。来ると、ここでも作品をつくってほしいと依頼される。初めは絶対無理だと思ったが、子供達の表現レベルが高いので、何とかなるかもしれないと考える。1曲分なんとか目鼻がついたところで、スタッフよりもう1曲分つくってほしいと言われる。子供達にしてみれば、初めて知った世界をいきなり自分達で演じている。とてもたいへんで、不安なのだ。熱心なスタッフの気持ちはよくわかるが、今回は無理しない方がよいと思う。少し不満そうであったが……。

他の小学校は、バイクで中心地から10～20分しか離れていないのに、いずれも子供達はたいへんにシャイで、何かをやり始めるまでに時間がかかる。また、拍子打ちをさせても、♪♪♪♪といったリズムを理解するのに、10分位かかる。しかし子供達は十分楽しんでキャーキャー言っているし、そのような環境になっただけなので、別に悪いことでもなんでもないのだ。しかし先生達は、子供達がうまくできなかつたり間違ったりすると、すぐ怒鳴る。いちばん困ってしまったのは、パントマイムの最中「これは何かな？」と私が言い、子供達がじっと考えこんだり間違ったりすると、怒ることだ

った。先生達は初日に地元のホールで私がパントマイムを演じた時、見学に来ているので、答えを知っているだけなのだ。中には手品のネタを先に説明してしまう先生もいた。先生方は、子供達が自分で考えたり想像したりすることが大切であることが、よく分からないようだった。とにかく「正しく」鑑賞させたいのだ。そうでなくても消極的な子供達は、ますます萎縮してしまう。

ここまできて、今まで疑問に思っていた事、ワークショップでうまくいかなかった事の謎が解けてきた。ラオスにおいては、正しい事は1つなのだ。表現の世界においても、見本またはお手本といったものははっきりあり、それにより近いことが、うまいことなのだ。いちばん良い例が、「絵」。大人も子供もレベルの差はあるが、描き方がみな同じパターンである。大人で、しかもうまいと言われている人の絵になると、もう全員同じ。中心に川が流れており、舟、家、山の夕日、アヒルが2羽。ワークショップの中で、子供達が固まってしまうことがよくある。その時、私はだいたい「あなたもいい、あなたのもいい、違っていていいんだよ」と言ったり、見本をみせず「好きにやってみて!」「あなたは、どれが好き?」と言ったりしている

のだ。またAの子とBの子が少し違う動きをしていますが、私が無視するので、C.C.C.のスタッフや事務所でアシスタントをしてくれたバンオーンさんに「どうするんだ、どうするんだ」とよく言われた。子供達にしてみても、1から10までの見本をみせずに「さあやってみよう!」と言われるのだから、困ったことだろう。数で覚えるのは得意だが、音楽にのれないのも、きっと原因は同じだろう。自由な表現があってもよいではないかという考え方は、西洋に始まった1つの方法なので、一概にそれの方が良いとは言えない。日本の伝統芸も、“正しい型”の世界である。

ここでは、1つ謎が解けたとだけ言っておきたい。深く考えると、私自身よくわからないのだ。しかし謎が解けてはっきりしたことは、私が考えている以上に、先生方が考えているよりもっともっと、子供達にとって私のワークショップは未知のものであり、手さぐりだったのだ。そして子供というものは、けっこう簡単に新しい経験をクリアしてしまう。このサイヤプリの小さな小学校のワークショップにおいても、あまりの理解力のなさに青くなることもしばしばで、先生があわてて怒鳴るのも無理はないと思われる事さえあったが、少し気長に続ければ、全くことばの説明なしに、子供達はできるようになってしまうのだった。

■ポリカムサイ ワークショップ

6月12日(月)～6月18日(日)

ポリカムサイでは、現在私の知っている限りラオスの中で読み聞かせや歌、手あそびなどのレポーター

がいちばん多く積極的に活動している、通称ニヤイさんと2人で、ワークショップをすることになった。彼女の方がラオスの子供達のことをよく知っている事から、たいへんよい勉強になった。

まず第1に、期間も終わりに近づいて、重大な日本とラオスの子供の差を知る。ニヤイさんのレポートリーは、多いと言ってもビエンチャンから持参した5冊ほどの絵本、紙芝居2つ、歌、あそび5つほどである。しかもほとんどがポリカムサイの子供達にはおなじみのものであり、新しいレポートリーは1つか2つ。そのうえ彼女は午前と午後、同じレポートリーをしている。しかし、子供達はすごく盛り上がる。そして自分のよく知っていることなので、集中力が続くのだ。私は今までたいへん苦勞して、同じ子供に同じワークショップをしないようにしてきた。日本の子供は、1度見て1度驚いたら、もうおしまいなのだ。2度目のことには見向きもしない。しかし、ラオスではずいぶん事情が違うようだ。子供達がよく30分もしないうちに疲れたと言って次々に休むことも、暑い気候のせいだとばかり思っていたが、そうではない。内容的には簡単でも、次々に新しい事をするのは、こちらの子供にとってほんとに「疲れる」ことだったのだ。試しにある日、前日と全く同じプログラムでおこなってみた。子供達は大喜びで、「疲れる子」も少なかった。

次に、これは前々から気づいていたことだが、ラオス独特のかけあい方法がある。これはビエンチャン、サイヤブリ、ポリカムサイ共通しており、その独特のテンポ、方法は、



ポリカムサイCCCでのワークショップ

やはりラオスの人の方がバツグンにうまい。そしてそれをうまく使いこなせる人(たとえばニヤイさん)は、少しくらいつまらない絵本でも、そのかけあいを利用して面白くしてしまう。これは真似できないが、よく知ることができた。

最後に、どこでも子供文化の中心となっているのは、10~12才の子供達である。兄弟みんな来るので年齢差は大きい、やはり小さい子は周囲をウロウロしているにとどまっている。ところが読み聞かせや紙芝居は、日本の低年齢児用がほとんどである。「これは何かな?」「ぶたー」といったテンポの紙芝居で12才の子供が大いに盛り上がっていることに対して、どのように捉えたらいいのかな?というのが、素朴な疑問だった。

ポリカムサイでも毎日その調子で盛り上がっていたが、ある夜ニヤイさんが、明日かぐや姫の紙芝居を演じてみたいので演出的に相談したいと言ってきた。かぐや姫は'93年に私達が持ってきた手作り紙芝居で、日本の風土の民話をけっこう堅苦しく並べた、あまり良い出来のものではない。彼女も私も、子供達にはむしろかしいだろうと内心思っている。2人で少し練習し、次の日に臨んだ。今までのようなワーワーという盛り上がりはなく、淡々と進む。彼女

はよく読みこなしており、たいへんうまい。何ということもなく終了。盛り上がらなかった事だけは確か、やっぱりね、と思ってしまう。しかし、次の日になってまたワーワーものの紙芝居をして、しばらくして近くにいた子に何の紙芝居がいちばん好きかと聞くと、なんと「かぐや姫」と言う。みんなに聞いてみると、それぞれなのだが、けっこう「かぐや姫」の子もいる。何となく、けっこう面倒な物語性のあるものも、低年齢児用のものも、彼らはそれぞれに楽しんでおり、年齢によって勝手に想像力を働かせているようなのである。これは何才児向きと限定している、こちらの考えの方が変なのではないかと思ってしまう。それに、表向き子供に受けることばかり考える必要もないのだ。いちばん最初は、まず受けた方がよいと思う。子供が興味を持ったようなら、できるだけ様々な事を試してもよいのではないか? きっと子供達はいろいろな受け止め方をするのではないだろうか?

今回、私が回った3ヶ所の子供達は、いずれもラオスで文化に触れる機会の多い、比較的環境にめぐまれた子供達である。山の中の子供はまた全然違うだろう。まだまだ分からない事がたくさんあるということだ。

会の活動に参加、お手伝い して下さる方を お待ちしております。

絵本の送付

現在、本会では送付絵本リスト(103冊)を作り、そのリストの本をラオスに送っております。会までリストをご請求ください。

また、リスト以外でも、工作の本、各種図鑑、楽譜などにつきましても、現地では希望いたしております。お手元にごございましたら、次のような方法でお送り下さい。

絵本の輸送・保管にはお金がかかります。輸送運賃を少しでも無駄にしないために、できるだけ絵本は、現地事務所に直接お送り下さい。国際郵便小包の船便で、1箱およそ5,300円(10Kg)～8,300円(20Kg)です。現地の受け入れ先住所は、下記の通りです。なお、お送りいただく際は再度、東京事務所までご連絡下さい(現地事務所に連絡するため)。

□送り先

MINISTRY OF INFORMATION AND CULTURE,
DEPARTMENT OF LITERATURE AND MASSCULTURE
CHILDREN'S CULTURE CENTER (A.S.P.B.)
VIENTIANE, LAO P.D.R.

現地への直接送付がどうしても無理な場合、分量が少ない場合について、現地までの送料をご負担いただければ東京事務所でお預かりすることも可能です。送料は下の表を参考に「本送料」と明記の上、郵便振替にてお送り下さい。

□国際郵便小包船便料金

5Kg	3,300円	7Kg	4,100円
10Kg	5,300円	12Kg	5,900円
15Kg	6,800円		

□郵便振替

00100-1-125420
ラオスの子供に絵本を送る会

使用済みテレホンカードの収集もおこなっています。集めたテレホンカードは、欧米のコレクターに向けて販売する業者を通して換金し、ラオス語の絵本製作など会の運営に使用します。(こちらは東京事務所へお送り下さい)

月例ミーティングをのぞいてみませんか。

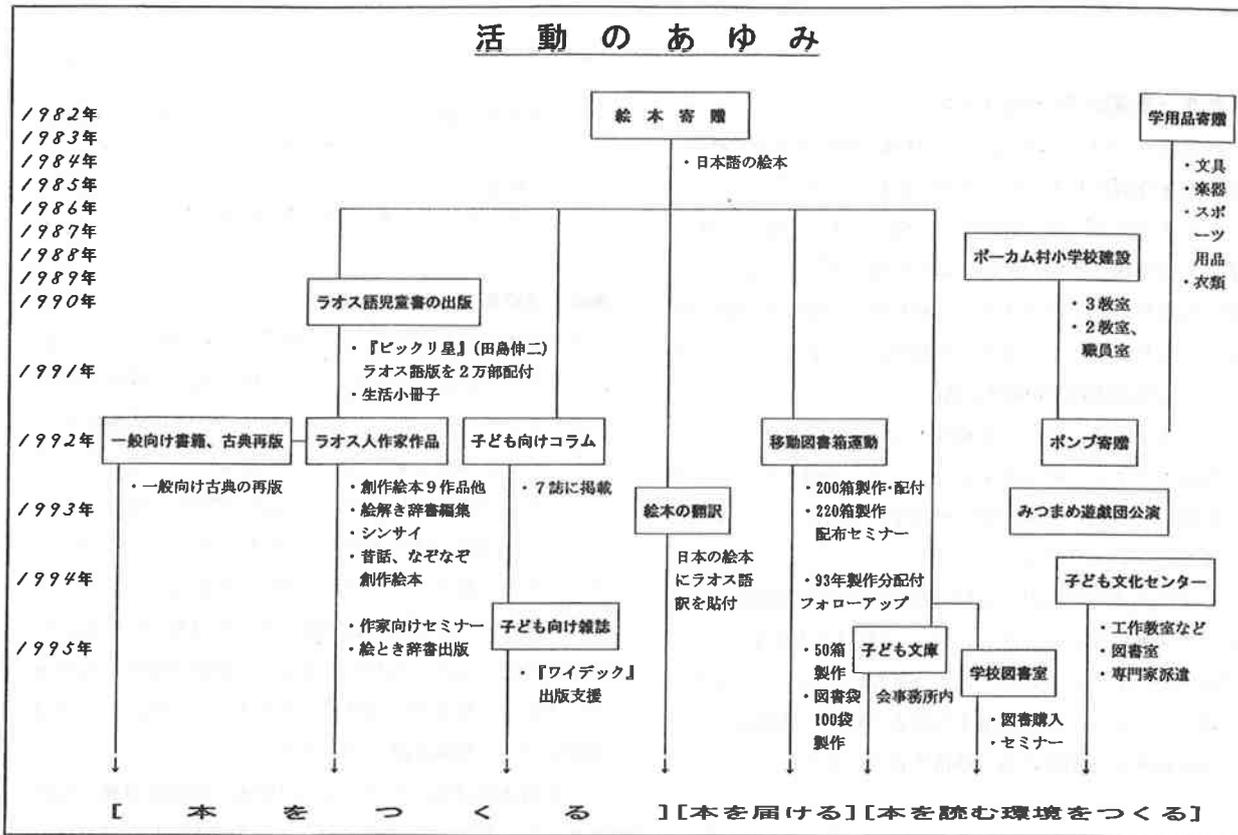
- 第1日曜日 午後1時より
- 「ラオスの子供に絵本を送る会」事務所にて
(都営地下鉄浅草線・西馬込駅下車 徒歩5分)

■私たちの活動を資金面から支えてくださる方は、
郵便振替にて、下記までご送金ください。
〔00100-1-125420 ラオスの子供に絵本を送る会〕

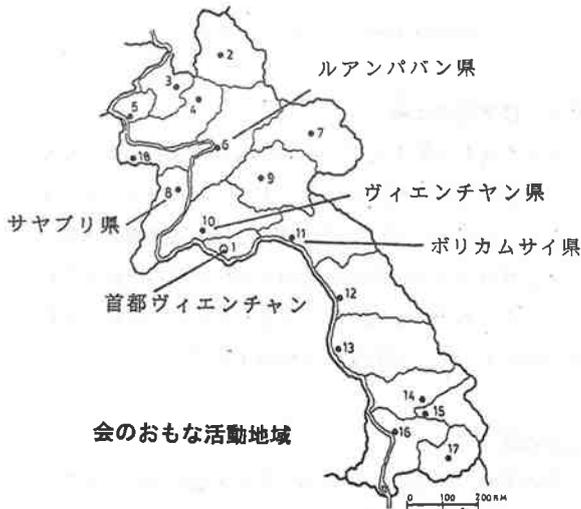


絵本の読み聞かせを聞く子どもたち。
ヴィエンチャン市内の小学校。

活動のあゆみ



会の事務所内の子ども文庫にて



1995年活動報告書

<絵本一冊運動プロジェクト>

「図書箱」に入れる本がない。これは会が約3年間、移動図書箱を作製配布するなかで強く感じてきたことです。

これまで会で、多くの方々のご協力により出版してきた子ども用各種図書は42種類、約20万冊になりました。近年、様々なNGO団体がラオスで子ども向けの図書を出版するようになりましたが、現在、首都ヴィエンチャンで手に入る子ども用図書は100種類に満たないとのこと。

各団体が出版している図書は、小学校低学年向けの12～16頁程度のカラー絵本が主流です。当会が過去2年にわたり出版してきた「古典図書」再版など中高校生向けの図書はまだ少ないようです。

中学校や高等学校から、「空教室を利用して図書室を作るので図書の援助して欲しい」という要請がきますが、小学校と同じものしか送ることができない状態です。文学的な読み物、自国の文化に関する図書の需要、評価は高く、今後も継続した出版が強く期待されています。

●創作絵本の出版

ラオス人に作家による小学校高学年、中学校向けの創作図書を出版する計画は、予算上の都合と適切な作品が無かったことで、本年は出版できませんでした。

●文字・数字絵本出版

作家の育成を目的として、日本の絵本作家若山憲さんを講師にお招きし、専門家を対象とする「絵本づくりセミナー」を3月に開催。「文字・数字絵本」の出版準備を進めました。これは参加者の作品を若山さんに添削指導をしていただき、高い水準の原稿として完成しました。現在、出版の準備が進められ、1996年6月出版予定です。

●古典再版

革命の混乱で消滅し、入手不可能な古典のうち、本年はラオス国立図書館の要請による3作品を再版しました。

- 1.「孤児キーフート」 7000部
- 2.「クンルーとナンオア」 5000部

94年12月編集作業完了、95年3月に印刷、出版。

3.「ラオス語の歴史」 2000部 6月に印刷、出版。

4.「シートンマノラー」 3000部

編集は完了、コーディネーターの意見で挿し絵を書き換えるため、出版は96年春の予定。

●絵とき辞書

子ども用の辞書がなく、本の内容がよく分からないままに読んでいる状況を改善するため、挿し絵入り辞書の編集が進められていました。会では一昨年より編集費を援助、本年印刷費を援助しました。途中現地で印刷用紙の欠乏により、予定が遅れましたが、8月に4500部の出版にこぎ着けました。出版には、メディアでの広報も有り、延べ222件の方々のご協力をいただくことができました。

ラオス初の子ども用国語辞典「絵とき辞書」は、現地で大好評で迎えられ、当初小中学校へ一冊ずつ配布する予定でしたが、1校2冊に切り替えられました。秋に2500部の増刷を決定、準備が進んでいます。

この辞書进行评估したユニセフが別途1500部を自費で印刷するなど、現地での評価は高く、極めて成功したプロジェクトとなりました。



絵とき辞書を届けて(左の人が広げている厚い本)。
ヴィエンチャン県トゥラコム郡

●出版委員会

ラオス側からの出版依頼も増加し、どの本が出版するのに適当か、優先順位をどうするかなど、的確に把握する必要があります。そのため、現地コーディネーターを中心に「出版委員会」をつくることを提案した結果、情報文化省の機関として設置されることが決定されました。

●移動図書箱

ラオスではあらゆる種類の図書が少ないこともあり、本

の流通システムがありません。そのため全国の教育委員会などの拠点に自ら持ち込む必要があります。

会では、「移動図書館」で本を配布してきました。これはラオス政府の国家プロジェクト「読書推進運動」の支援として行っています。この運動は、子ども・一般・教員向けの書籍約135冊を、70×80×25cmほどの木製の箱（開くと書棚になる）「移動図書館」に詰め、全国の小学校に配布し、その箱を図書館として機能させるもので、識字と読書習慣の定着化を目的としています。

ラオス政府は「2000年までにすべての小学校に移動図書館を」というスローガンを立てています。ラオス全土には約7,000の小学校がありますが、現時点での配布は2,000箱に満たないとのこと。

本会ではこれまで、420箱を製作、配布してきました。

これまで「移動図書館」は、効果について問題点が指摘されてきましたが、この1年ほどでラオス側の対応にも変化がみられ、配布状況についての把握も良くなり、さらにより柔軟に配布ができるようになってきています。

また、補充用図書配布の必要性が浸透し、利用状況が改善。「多く配布する」第一段階を経て、「効果」が意識される質の段階へと入ってきています。

当会が94年に配布し、その後半年位の間隔でフォローをしてきたサヤプリ県サヤプリ郡は、よく利用し、先生方の意識も高い学校が多いとのこと。

自主的に「このような本が欲しい」と本のリストを提出してきたり、子どもの興味をいかに引きつけるかと工夫する先生が少なくないようです。他の地方ではこのような状態はなかなか見られません。定期的に本が補充され、その際に次への要請を聞いてもらえるという状況が、このような状態を作り出したと思われ。

サヤプリ郡では先生同士の交流が盛んで、早い時期から図書館を持っていた学校が、新しく配られた学校に運用方法のアドバイスをするなど、情報交換をして図書館を利用しています。今後この地区をモデルケースとし、他の地区にも広げていきたいと考えています。

●図書袋

重い移動図書館を運搬しやすいように改良した「図書袋」は壁掛け式の本棚として利用できることから、親しみやすい伝統織物を利用して作製することを計画しました（それまでは、カーキ色の軍用布を利用したものでした）。

4月から7月に試作を重ね、織物の方が丈夫で、コストもそれほどかからず、さらに、布を織るルアンパバーンの孤児院の子どもたちの自立支援にもなることから織物の利用を決定しました。

しかし、図書袋のための布は従来の織物より幅広くなるため特製の織り機が必要で、手作業となるため、製作に時間がかかることになりました。

<子ども文化センタープロジェクト>

自然の中を駆け回って遊ぶより、隣国タイから流れ込むTV番組にかじり付いているのが当たり前なのが近年のラオスの子供たちです。その結果、姉妹語であるタイ語がラオス語と区別されないまま、日常会話に頻繁に用いられるようになってきています。TV番組と共に流れ込む物質主義も子どもの世界を変え始めました。

「子ども文化センター」のアイデアは、このような子どもたちの状況に心を痛めた、会の代表チャントソン・インタヴォンと、会の現地受け入れ責任者である情報文化省のダラーさんとの間で「学校教育では行われていない、図画工作、音楽、スポーツ等ができる施設を図書室と共に作り、教育環境を変えよう」と1994年6月に生まれました。

●ヴィエンチャン 子ども文化センター

センターは、火曜～日曜、午前8時～午後6時ごろまで開いています（当初は月曜～金曜の午後1時～午後5時でしたが、利用しやすい時間帯に変更されました）。

開設当初は、私立学校の2階部分を改装して用いていました。1階の私立学校は移転するとのことで、いずれ建物全体をセンターとする予定でしたが、本年3月になって持ち主が突然建物の返却を政府に申し出て、センターは出でいかねばならなくなりました。

一時は存続も危ぶまれましたが、5月より市内の個人の所有する建物に移転し、活動を継続。教育熱心な親の送り迎えなどの協力もあり、継続して利用している子どもは少なくありません。現在、毎日のように登録申込者が訪れ、また地方の情報文化省の人々や、外国からの来賓が見学を訪れているとのこと。

現在、図書室、編み物教室、工作教室、絵画教室、演劇教室、（さらに他団体の支援による伝統音楽教室、伝統舞踊教室）などが開かれています。これらは学校が休みの土曜日と日曜日に開かれます。

昨年春には、会が派遣した あさぬまちずこ による、身体表現の教室も開催され、大変喜ばれました。

●ポリカムサイ 子ども文化センター

ポリカムサイ県では、ナイトクラブが営業されていた大きな建物を情報文化省、教育省、地元の親の三者が一体となって運動を進め、子どものための施設、子ども文化センターにしました。

資金がなく、改装ができず、設備は充実していませんが、立地がよく、多くの子どもたちに利用されています。

開館時間は、水曜～金曜が午後2時～4時30分、土曜日が午前8時～午後4時30分。平日は、学校帰りの子どもたちが本を借りていきます。土曜日には、お絵描き、折り紙、工作、お話づくり、紙芝居など様々なプログラムがおこなわれ、80人から90人の子どもたちがやってきます。

各プログラムは県情報文化省のスタッフが交代して指導。スタッフはヴィエンチャンでおこなわれるセミナーに積極的に参加し、そこで吸収したことを活動に生かしています。机・椅子などの設備が整っていないこと、先生がいないことが悩みとのことです。



ポリカムサイCCCの図書室

●サヤブリ 子ども文化センター

サヤブリ県では県の教育省が協力的で、サヤブリ小学校の図書室を子ども文化センターとして兼用しています。伝統楽器なども一緒に保管しなければならず、さまざまなプログラムを運営するには少々不便です。

図書室は、平日は学校の開いている時間に開き、子どもたちは休み時間に利用します。伝統音楽、伝統舞踊、絵画、編み物など積極的にプログラム運営をしています。これらのプログラムは平日午後4時～5時、土曜日の午前8時～4時までおこなわれます。

現在登録者は定員をはるかに超えた170人。熱心なスタッフのもと、施設よりも内容の充実に力を入れている様子は、頼もしく、今後の可能性を大きく期待させます。

●紙芝居指導等専門家派遣

95年3月21日～4月3日、「専門家派遣セミナー」を実施。絵本づくり教室の講師に絵本作家の若山憲さん、紙芝居・工作セミナーの講師に造形作家のやべみつのりさんを派遣しました。東京事務所からも、調整のため2人（チャンタソン・森）を同時に派遣。（うち森はフォローアップ調査も兼務）その他、自己費用で4名が同行しました。

内容は、文字絵本・数字絵本の作成、身近なものを使った工作、紙芝居製作、野焼きなど、盛り沢山でした。参加者は、絵本の製作者や幼稚園の教師、子ども文化センターの職員など、ふだんから児童教育に関わっている人が中心で、いずれも非常に熱心に受講していました。

* * *

専門家2人のセミナーの感想は、「ピラミットにたとえると今回のセミナーは頂点に近い。美術教育がなされていない状況では、底辺につながるものがないと向上しない。底辺をつくるには、まず「自覚」が必要。その上で添削指導などで技術を修得できる可能性はある。参加者の中には、国際的に通用する能力をもつ人もいた。自分の作品が出版されることが今後への刺激になる。また、よりよい絵本を出版するには、作家と編集者の双方の向上が必要だ」



専門家派遣セミナー、絵本づくりコース

<子ども文庫(学校図書室)プロジェクト>

ラオスの学校には無いに等しい学校図書室を整備、開設し、身近にいつも本がある環境をつくり、より広範な子どもたちに文字文化の浸透を計るため、本年より、「子ども文庫(学校図書室)プロジェクト」をスタートしました。

95年4月～8月、準備期間として、会のヴィエンチャン

事務所内の子ども文庫の運営を進めました。これは、事務所内のスペースを利用して94年より試験的にはじめていたもので、子どもたちの状態やニーズを知るためにも重要な役割を果たしています。

●事務所内子ども文庫

子ども文庫は管理アシスタント1名が常勤し、月曜～土曜開いています。狭いにも関わらず、1日に60～70人ほどの子どもたちが訪れます。しかも、子どもたちは学校の昼休み時間に集中してやってくるのでとても混みます。

混み過ぎると目が行き届かず、貸し出しもできないこともありましたが、隣室が空き、間仕切壁を取り壊し、文庫スペースを拡張しました。9月に全面的に改修し、2倍の広さになった文庫には、さらに多くの子どもたちがやってきます。登録の申込に来る子どもは後を絶えません。

紙と色鉛筆置いて自由に絵を描くコーナーを設けたところ、大好評で、多くの子どもたちが本を借りに来たついでに楽しげに絵を描いています。隣接の小部屋で毎週土曜日に、日本から贈られた鍵盤ハーモニカを使って音楽教室もはじめました。

ラオスの学校教育のなかでは音楽や図画工作の授業はほとんどおこなわれず、この文庫は情操教育の場としての広がりをもつこととなりました。文庫の運営で得た知識・技術は学校図書室の運営に活かされています。

●コンピューター購入

ラオス語の図書は少ないので、それを補うため、購入あるいは寄贈された日本語やタイ語の図書にラオス語の翻訳を貼って利用します。そのため、訳文の作成やレイアウト作業用にパソコンを購入しました。翻訳文はプロの作家に文章のチェックを受けたのち、図書に貼り付けます。パソコンは事業管理にも活用しています。

●学校図書室開設

学校図書室の開設にあたっては、館長をはじめ国立図書館が全面的に協力、支援をして下さいました。

5校の図書室設立に向けて、9月末～11月は図書を購入し、ブックナンバー、ブックカードを付け、蔵書リストを作成。日本語やタイ語の図書には翻訳文を貼付しました。

ひとつひとつ紙とりのりを使った手作業です。ラオスでは図書の管理や貸し出しなどについての知識がある人がほと

んどいません。この事業は本年スタートさせたばかりであり、新しくスタッフ(アシスタント)を雇用する時間がなかったため、すでに知識のある国立図書館員にアルバイトとして作業をお手伝いしていただきました。

図書室は12月～1月に開設。本にほとんど触れたことのない先生向けにセミナーを開催しました。図書の管理、整理、修繕の仕方、貸し出し方法などについては国立図書館スタッフが講義し、当会のスタッフは子どもへの本の与え方、読書の楽しみ方などについて講義しました。

各校で図書室担当の先生は1名ですが、全教員の参加を呼びかけ、図書室と子どもたちの橋渡し役となる先生に、図書室への理解と協力を求めました。学校によっては授業に影響がでないよう、授業のない土曜日に開設セミナーをおこなったところもあります。村長などにも参加してもらい、地域に開かれた場となることをめざしています。

開設セミナーは以下の通り行われました。

- | | | | |
|-------|-----|-----|-----------|
| 1995年 | 12月 | 15日 | ポーンケン小学校 |
| | 12月 | 22日 | パサイ小学校 |
| 1996年 | 1月 | 6日 | ノンニエン小学校 |
| | 1月 | 13日 | ムアンノイ小中学校 |
| | 1月 | 19日 | ナークワイ小中学校 |



学校図書室の開設

現在、各学校図書室は、毎日たくさん子どもたちがやってくる様子で、評判もよいとのこと。学校側からは、図書の補充、絵の具、紙、工作材料などの希望が寄せられています。図書室という場を利用し、情操教育の場として、子どもたちが必要に応じて図画工作ができるようにしたいとのこと。

今後はいかに、学校そして地域のなかに定着させてゆくかが課題です。将来的には、隣接小学校の図書室自主整備のモデル校として、周辺のセンターとなることをめざしたいと思います。

<調査・調整・セミナー派遣>

本年、調査調整員の会の予算による派遣は5回(5名)実施しました。

①3月21日～4月6日 森 透

「日本人専門家派遣セミナー」調整、移動図書館のフォローアップ調査(サヤプリ県)。

②5月10日～6月30日 あさぬま ちずこ

ヴィエンチャン、ポリカムサイ、サヤプリの各「子ども文化センター」の運営状況の調査。滞在形式をとりより具体的な現状調査を行いました。現地スタッフと一緒に子ども文化センターでプログラムを運営し、聞き取り調査だけでは見えない運営状況を知ることができました。

③6月23日～7月3日 チャンタソン・インタヴオン

「子ども文化センター」の次年度(1995年後期～1996年)の計画、予算の調整、図書出版事業の調整、現地スタッフとのプロジェクト運営の調整など。

④11月16日～12月20日 安井 清子

ヴィエンチャン、サヤプリ「子ども文化センター」、事務所内子ども文庫の運営のアドバイスと調査。サヤプリでは学校図書室設置候補校への現地調査も実施。

⑤11月16日～1996年2月7日 赤井 朱子

出版調整、移動図書館・図書袋の進行管理、「子ども文化センター」の事業調査、学校図書室開設式への同行、現地スタッフとのプロジェクト調整。

* *

これ以外に、他の所用、プロジェクト視察同行などの目的でチャンタソン・インタヴオン、森透、赤井朱子、野口朝夫がラオスを訪問し、同時に現地事務所との調整を行っています。

<会の運営>

●東京事務所の運営

春から、念願の有給スタッフが東京事務所に勤務することとなりましたが、予算の都合などから、週3回程度の勤務体制でした。定期的なボランティアスタッフの数も増しました。しかしながら、事務量の増加は衰えることなく、相変わらず一部のボランティアの仕事量が限度を超える状況となっています。

本年は、高校生が新たに日常活動に参加するなど、新人の参加が多く見られました。また、活動に対する問い合わせも非常に増えています。各地の小、中、高校からの活動

協力の申し出が多かったのも、これまでにないボランティア熱の高まりとして感じられました。しかし、残念ながら折角の関心のある方々の参加を生かし切れていないのが現実で、今後の対応が大変重要になっています。

●国内活動

会では、現地のプロジェクトだけでなく、私たちの活動を広く知っていただくために、日本国内でも様々な活動をおこなっています。本年、会主催でおこなったものは、

・1月13日 ドウアンドウアンさん・ウティンさん講演会
会の現地出版コーディネーターであり、絵とき辞書の著作者であるドウアンドウアンさんと、作家のウティンさんの来日に合わせて、「ラオスが今、求めているもの」と題した講演会をおこないました。

40人近い参加者で、活発に質疑応答がなされました。

・4月16日 ラオス正月パーティ「サバイディピーマイ」
ラオスの紹介、会の活動報告をしながら、ラオス料理を味わっていただくもので、毎年開催しています。本年は、昨年に引き続き、東京ガス株式会社大田支社様のご協力により、休日に特別に会場をお貸しいただき開催しました。参加者は140名を超え、ラオス人留学生による伝統舞踊も披露しました。



その他、以下の催しに参加・協力。昨年に比べ、活動がより活発になりました。

- ・3月21日 東京YMCA NGO国際フェスティバル
- ・6月11日 ねりまボランティアまつり
- ・7月15～16日 世田谷区立中央図書館 ご緑市
- ・9月30日～10月1日 国際協力フェスティバル
- ・10月3日 大田区ボランティア貯金推進協会総会
- ・10月9～13日 大森郵便局 活動紹介パネル展示
- ・10月16～23日 田園調布郵便局 活動紹介パネル展示
- ・10月21～22日 世田谷区立中央図書館 ご緑市
- ・11月1～3日 上智大学 ソフィア祭
- ・11月4～5日 大田区 OTAふれあいフェスタ
- ・11月12日 砺波市国際協力講演会

・12月16～17日 世田谷区立中央図書館 ご緑市

写真パネルの貸し出し

- ・港区役所文化祭
- ・多摩市立南貝取小学校ペルの会 ほか

●ヴィエンチャン事務所の運営

現地事務所の常勤スタッフは2人。1人は活動全体をコントロールし、もう1人が事務所付属の子ども文庫の管理を行っています。

子ども文庫は、月曜から土曜まで事務所の開いている時間はいつでも開いており、子どもたちはいつでも自由に出入りできます。平日は、昼休みの2時間に子どもたちは集中し、1日に約70人の子どもが本を借りていきます。文庫担当のスタッフのバンオーンが、小さな子どもに読み聞かせをしている時や、昼食をとっている時などには、常連の中学生の子どもたちが代わりに本の貸し出しをおこない、時には会の一般事務作業を手伝ってくれるともあります。バンオーンは、子どもたちがほとんど来ない時間帯に、外にコピーをとりに行ったり、郵便を出しに行ったり、倉庫にある会出版の本を数え配布に備えたりと、アシスタントとして忙しく働いています。

活動全体をコントロールするパダブペットは、国立図書館・県教育省・子ども文化センターなどとのスケジュール調整から、新しく導入したコンピューターによる書類作成、会計処理、そして東京との調整と、そのプロジェクト管理をほぼ1人でこなしています。

東京同様、ヴィエンチャン事務所の事務量は増加しており、的確にプロジェクトを運営してゆくためには、今のままの体制では難しいということがわかってきました。

<この一年、難問の四季>

毎年2、3月は非常に忙しい時期です。会計の締めは12月ですが集計、まとめは年を越し、郵政省国際ボランティア貯金をはじめ活動助成金の申請がこの時期に集中するからです。4月に入り、その山を越し一寸一息。そしてまた、「ああー、また一年がたってしまった」と感慨にとられる時期でもあります。95年も会にとって忙しい年でした。

◆「絵とき辞書」がユニセフで増刷された件。多くの皆さんの支援で出版事業が成り立っていることを考えれば、再版には会の名前を明示させるべきだとの意見もありましたが、子ども達のためにはクレジット無しでも、より広く出版し

てもらった方が主旨に合致するとの結論を出しました。

◆夏になって出てきたヴィエンチャン子ども文化センターの移転問題。移転先には経済的に余裕のある子どもだけが継続して通っていることやお稽古ごとのセンターという性格が次第に色濃くなり、近所の子ども誰でも遊びに来る施設というイメージから少しはなれてきてしまいました。問題は、これらの変化が東京事務所には的確に伝わらずに物事が進んでしまった点にあります。また、センター側からの会計報告が本会の関係する部分のみで、施設運営にどの程度他団体から経済支援があるかなど全体像が明確でないことも問題となっています。これらの事態を改善するため、現地側担当者と数回に渡って話し合いをもち、その結果、総合的な計画書、報告書の提出の約束など事態の改善の方向を見いだしました。

◆秋に入って新たな頭の痛い問題が生じました。これまでもセンターの運営の一部を支援していた曹洞宗国際ボランティア会がセンターのすぐ近くに活動内容が重複する「子どもの家」を新設することを決めたのです。

小さなヴィエンチャンの町で、歩いてすぐの所に同じような施設は二つは要らないのではないかとの意見もあり、どのような対応を採るのか、議論が続きました。「会は、情操教育施設支援から撤回すべき」とか、「地方の施設の支援に切り替えるべき」など方向性を巡る議論が出ていますが、結論はまだ出ていません。

◆暮れ。もう一つの出来事が起こりました。現地に派遣した東京事務所の赤井朱子が Deng 熱にかかったのです。タイのノンカイの病院へ入院し、すぐに回復することができ何よりだったのですが、ヴィエンチャンからタイへの移送は、現地事務所だけでは対応ができず、曹洞宗国際ボランティア会のヴィエンチャン事務所のみなさんに大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

入院が必要な病人が出たのは初めてで、海外での活動では「危機管理」能力の必要性を改めて痛感させられました。

* * *

昨年の活動を通じて痛感したのは、事業規模、内容が拡大している割には、まだそれに対応できる会の能力が育っていないということです。現地事務所との連絡も言葉の問題が残っています。資金の限られた中、現地常駐スタッフの派遣も困難があります。我々の能力の中で、何を、どのような順番で選択していけばよいのか。拡大してゆく社会的責任の狭間で思い迷うこの頃です。(野口朝夫)

1995年度 会計報告書

95年度は多くの方から「絵とき辞書」へ指定寄付をいただき、予算案より多額の収入となった。個人寄付の増加は、活動の柔軟性を増すので大変有り難い。しかし全収入に対して個人寄付は30%弱に留まる。団体プロジェクト寄付が63%で、そのうち国際ボランティア貯金が30%を占める。支出では、〈絵本一冊運動〉の創作絵本出版は資金の不足と準備不足などから実施できなかった。移動図書館、袋関連では予算の消化が遅れ、96年度に繰り越されている。新規の〈子ども文庫〉プロジェクトは、外務省のNGO事業補助金から精算払いで支援を受ける予定。

〈東京事務諸経費〉では、ニュースレター「ラオスの子供に絵本を送る会通信」が2回しか発行できなかったこと、有給スタッフの出勤が週3回であったことなどが予算余剰の理由となっている。

次期繰越金が多いのは、配分金を受ける時期とプロジェクトの支払時期のズレやプロジェクトの遅れによる。

毎週のボランティア・スタッフによる会計処理、コンピュータ・プログラムの作成などにより、本年度は迅速に事務処理ができた。現地事務所もコンピュータを導入し、会計データ授受の簡便化を進めている。

1995年(1995.1.1~1995.12.31)決算

■前期より繰越 5,673,994円 5,673,994円 プロジェクト未払いを含む

収入の部	予算	決算
一般寄付(のべ456件)	4,200,000円	3,115,884円
辞書指定一般寄付(のべ218件)		1,305,830円
プロジェクト援助金	8,148,000円	9,704,428円
イベント収入	500,000円	851,065円
雑収入	250,000円	134,630円
本・絵はがき等収入		156,194円
受取利息		17,519円
小計	13,098,000円	15,393,964円

摘要	
国際ボランティア貯金	4,644,000円
山田国際財団設立委員会	2,800,000円
出雲大社	1,000,000円
国際開発救援財団	630,000円
日本ユネスコ協会連盟	504,635円
栃木県青年海外協力隊OB会	180,000円
東九州女子短期大学	54,207円
パーティ参加費等	
為替差益を含む	

■支出の部

1. プロジェクト経費 (換算レート: \$1=¥100)

〈絵本一冊運動〉

絵とき辞書印刷費	1,875,000円	3,671,411円	初版4500冊+第2版2,500冊半額分
古典再版	2,286,000円	1,054,333円	3種出版費+1種編集費(96年出版)
文字・数字絵本出版	2,700,000円	0円	96年印刷予定
創作絵本出版	1,350,000円	0円	
『ワイドック』出版援助	150,000円	0円	
出版コーディネーター人件費	60,000円	125,100円	現地コーディネーター1名
移動図書館製作費	700,000円	411,840円	箱製作・本代 50セット
配布セミナー費	170,000円	0円	配布セミナーは96年に実施予定
フォローアップ費	170,000円	145,137円	図書館の地方配送費も含む
補充用図書購入費	400,000円		CCC図書補充購入費に分類
図書袋製作費	600,000円	0円	100セット 96年完成予定
図書袋地方輸送費	100,000円	0円	96年配布予定
小計	10,561,000円	5,407,821円	

<子ども文化センター (CCC) >

図書室管理スタッフ人件費	240,000円	360,000円
工作室等指導員人件費	222,000円	210,600円
タイ語図書翻訳	72,000円	101,088円
図書補充購入費・補修費	350,000円	466,960円
運営費	390,000円	184,450円
コンピューター購入費	300,000円	237,600円
現地スタッフ日本研修	310,000円	0円
児童用図書製作セミナー	300,000円	154,500円
専門家派遣セミナー開催費	180,000円	268,273円
各種ワークショップ開催費		99,377円
小計	2,364,000円	2,082,848円

ヴィエンチャン+地方2か所
 ヴィエンチャン+地方2か所
 移動図書箱補充用図書と兼ねる
 教材費・ヴィエンチャンCCC家賃等
 図書ラオス語翻訳文作製用
 1名10日間程度 96年実施予定
 1月実施
 3月実施 日本から講師派遣
 「みつめめ遊戯団」、子どもの交流会

<子ども文庫>

図書室改修・整備費		168,667円
教材図書購入費		231,611円
活動運営費		12,354円
現地補助員人件費		50,395円
小計		463,027円

室内改修・本棚・机等 3か所分
 6か所分
 飲料水・交通費等
 文庫管理スタッフ人件費

<その他>

出張費		1,591,755円
調査調整・セミナー派遣費	1,137,000円	
専門家派遣費	471,000円	
専門家セミナー調整派遣費	189,000円	
学校建設補助金		220,000円
頒布品仕入		98,248円
小計	1,797,000円	1,910,003円

プロジェクト調査調整員4名、専門家2名派遣
 <絵本一冊運動>4名分
 <子ども文化センター>専門家2名
 <子ども文化センター>調整員1名
 指定寄付など
 絵はがき・書籍等

2. 会の運営 (プロジェクト管理)

<東京事務所経費> (換算レート: \$1=¥100)

事務所家賃	200,000円	200,000円
通信費	250,000円	192,715円
運搬費	50,000円	72,983円
事務費	80,000円	99,138円
広報費	600,000円	396,969円
人件費	1,500,000円	960,970円
交通費	150,000円	36,320円
備品	50,000円	0円
諸会費		30,000円
会議・交際費		17,534円
イベント経費	200,000円	228,920円
雑費	150,000円	8,718円
小計	3,230,000円	2,244,267円

水道光熱費含む
 電話・郵便代等
 図書・写真パネル等 輸送
 文房具等
 ニュースレター発行・発送等
 有給スタッフ1名給与

団体会費
 お礼等
 お正月パーティ等
 送金手数料等

<ラオス事務所経費>

事務所家賃	65,000円	57,200円
水道光熱費	2,000円	2,397円
通信費	100,000円	116,771円
事務費	60,000円	34,898円
人件費	300,000円	208,411円
交通費	15,000円	17,285円
図書室運営費	200,000円	
備品	30,000円	306,751円
交際費		4,364円
厚生費		4,375円
雑費	20,000円	33,483円
小計	792,000円	785,935円

書類コピー代等
 事務所スタッフ1名

子ども文庫へ分類
 コンピューター、FAX購入費含
 慶弔費等
 出産祝い
 自治会費、郵便税等

<その他>

予備費	27,994円	
-----	---------	--

□支出合計	18,771,994円	12,893,901円
□次期繰越金	0円	8,174,057円

プロジェクト未払い分を含む

1996年度活動計画書

<絵本一冊運動プロジェクト>

●創作絵本、文字・数字絵本、古典出版

何を出版すべきかは、基本的に現地コーディネーター、ドゥアンドアンさんに作品の選定を依頼してきた。これまで候補作は恋愛小説が多かったり、政治的に微妙なものもあり、書き直しが必要とされたりで選定が難しく、簡単に次々と出版できないという事情がある。

本年より子ども文化センターに教育関係者、作家、本会コーディネーターなどによる「出版委員会」を設け、内容の検討、出版順位の決定をしていく。これにより、より公正で、質の確保された作品の出版が可能となる。現在、古典出版の作品についての検討が始められている。

また、会では書き手の育成を目的に、昨年、絵本作家の若山憲さんを講師にお招きし、作家志望者を対象に「絵本づくりセミナー」を開催した。その後数回におよぶ若山さんの添削指導で、出版にたえる水準の「数字絵本」の原稿が完成しつつある。現在、出版の準備が進められ、本年6月にできあがる予定だ。文字を使わない絵本なのでタイを含むインドシナ地域での普及も可能と考えている。

本年はラオス語文字絵本の完成もめざす。

●「絵とき辞書」増刷

昨年度多くの個人の方々のご協力により出版したラオス初の子どもの用語辞典「絵とき辞書」は、現地で大好評で迎えられた。当初の計画である小中学校各一冊の配布では不足し、2冊以上の配布に切り替えられた。そのため当初予定した7,000部発行では不足することとなり、ユニセフが1,500部自費で増刷した。会においても引き続き増刷を検討する必要があるとされている。

●移動図書館・図書袋製作、配布セミナー

移動図書館は、しまい込まれて十分利用されない学校もあるなど問題点が指摘されたが、昨年度2度にわたる現地調査の結果、地方の教育関係者よりきわめて強い希望があることが解った。利用状況は現場の管理者の熱意に左右されるが、本に親しんだ経験を持たない先生方にとり、子ども達にその意義を伝えることは容易なことではない。だからこそ配布セミナーは非常に大きな役割をはたしている。

とはいえ昨年調査したサヤブリ県の教育委員会、郡教育

委員会のように、自主的に図書を整備している熱心な地域もある。小規模な本会にとって、このような地域でプロジェクトを展開していくのが現実的であり効果的である。

本年の配布は、3月26～29日にボリカムサイ県ラクサオに25箱、4月8日～11日にルアンパバーン県に25箱とする。

図書袋は96年5月完成予定。配付先は国立図書館と相談の上、ボリカムサイ、ルアンパバーン、サヤブリ、シェンクワン、サワンナケートの各県を予定している。

●フォローアップセミナー、補充用図書購入

調査を通じ、図書館配布後のケアの重要性があらためて明らかになった。移動図書館は昨年度末までに420箱が配布を完了。図書館に入るのは135冊ほどで、以前に配布された図書館の本は読み古されてぼろぼろになったり、新たな補充がないため、飽きられてしまった箱もある。他団体が配布した図書館も、アフターケアがなく、使用されていないものもある。新たな本を補充し、子ども達の本への関心を持続させることは新たな図書館の配布と同様に重要だ。

そこで本年は補充用の本の購入を増やしたい。現地での希望もありこれらの本には、一部タイで購入する技術書なども入れようと考えている。

<子ども文化センタープロジェクト>

●子ども文化センターの運営協力

子ども文化センターは、94年に開設されたラオスで初めての子どものための情操教育機関で、現地で大変評判が高く、工作、演劇、絵画、編み物教室など受講希望者が絶えない。

センターは当初、ヴィエンチャンの官庁街の近くの小学校の校舎2階に開設されたが、建物所有者の都合で昨年夏、市内の別の場所に移転せざるを得なくなった。そのため本年から当分の間、家賃を支払う必要がでてきた。移転先は個人の住宅だった建物で、広くはあるが個室に分かれているなど使い勝手が悪くなった感はいなめない。

●子ども文化センター本部建設

ラオス政府より、新規に子ども文化センター建設予定地を確保提供するのでセンター本部の建物を建設してほしいとの要請がきている。場所はヴィエンチャンの中心地、朝

市場の近く。図書室を中心とした、地方の子ども文化センターのセンター的機能を持つ施設になる予定である。

ラオス政府の予算に、すでにこの建物の設計費用が計上されたとのことである。会としては予算上大変な負担だが、非常に好評なプロジェクトであり、地方組織のセンターとしての位置付けもあるので建設に協力する決定をした。

また地方都市のボリカムサイ、サヤプリで、自主的な子ども文化センター活動も活発化しており、本年はサヤプリへの支援を重点的に行う。

●専門家派遣セミナー

昨年実施した日本人作家による絵本づくりセミナーを発展させ、本年は3名の専門家による図画工作セミナーを開催する。昨年の経験から、大人の指導(作家、教員の育成)も大切だが子どもに直接働きかける方が、より効果的なのではないかという方向性が示されたためである。

そのため今回のセミナーでは子ども中心のプログラムに教育関係者を参加させる方向で行う予定である。

<子ども文庫プロジェクト>

●学校図書室整備

子ども文化センターが軌道に乗るとともに、利用者の子どもの間に階層的な偏りがあることがわかってきた。旧センターが官庁街にあったためか、裕福な家庭の子どもが多いように見受けられる。定員に限りがあり、広い層の子どもの希望に十分に答えられない現象を生じていた。

そこで会は、より地域に根ざした子ども文庫的な施設を求め、会事務所の図書室を充実させて「子ども文庫」として拡充を図った。この試みが極めて成功であったこと、従来の移動図書箱の配布が地方に限られ、ヴィエンチャンでは逆に本を手にすることが難しくなっていたことを解消する目的から、これまで無いに等しかった学校図書室の整備事業を昨年末から順次市内五つの小中学校で開始した。

本年は首都圏での開設を進める一方、利用状況などを調査しながら、ルアンパバン、サヤプリなどの地方でも2か所ほどの展開を計画している。

●絵画指導専門家長期派遣、図画工作教室の開設

学校図書室に、日本から長期間、若手のボランティアを派遣し、図画工作教室の開講を考えている。子ども文化センターで行ってきた絵画教室などの枠をひろげ、より多くの子ども達が自己表現の手段を獲得することをめざしたい。

<会の運営>

●東京事務所の運営

昨年春から念願の有給スタッフが東京事務所に勤務しているが、予算の都合から週3回程程度の勤務態勢となった。事務量は増加し、一部のボランティアの仕事量が限度を超えている。そのため本年度は、有給スタッフの勤務態勢を常勤化させていく。

また、事務所を訪れる若いボランティア希望者が増加していることから、若い力をどう結集していくのか、地方に居住する人たちにどのような協力体制をとっていただけるか検討を深めていきたい。

本年の事業計画は現地からの要請に応え、大幅に拡大している。プロジェクト資金はこれまでになく多額になり、不況と低金利の現状で大変厳しい事態になることが予想される。このため、従来の受け身に近い資金確保から、積極的な対応が必要となっている。プロジェクトを定め、キャンペーンを行い、個々の団体に個別にご寄付をお願いするなど新しい方法を開拓しなければならないだろう。このため、会計のよりいっそうのオープン化、監査の実施などまだ不十分な体制を改める必要がある。

また支援者の幅を広げるため、「通信」の安定した発刊のなど、より深くプロジェクトの内容をご理解いただき、国内での広報体制をより積極的に行う必要がある。

●現地事務所の運営

事業量の増加に伴い、ヴィエンチャン事務所の事務量も飛躍的に増加している。現在2名のスタッフが勤務しているが、子ども文庫プロジェクトの展開により増員が必要となっている。東京事務所との連携を強めるため、現地スタッフの英語力強化、東京側のラオス語能力強化が必要となっている。その一環として昨年末、東京スタッフを2か月に渡り現地事務所に派遣し、協働関係の強化を図った。

●現地スタッフ日本研修

本年5月中旬、現地スタッフの研修として、日本の子ども文庫活動、図書館活動の見学を行うので、現在その準備を進めている。研修期間は2週間程度。この間、支援者を対象に会の現地活動の報告会を行いたい。